不定期刊行　　第607号　2017.03.26

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩

## 山スキー三昧その3　十石山

3月12日、松田大氏と二人で、十石山にでかけた。7時45分白骨温泉の林道どんづまりまで進んで、車を止める。ほぼ夏道通りに進み、最初の1567mのマイナーピークを回り込んだところで先行のパーティに追いつく。「よくこんなマイナーな山に」と尋ねると、東京から「憧れの十石山に来ました」とのこと。お気をつけてと先に出る。9:45　中間部の台地を過ぎ、登りにかかる手前のコル（1810m）で一本取る。登り口が 1400m弱、2時間でようやく400m登ったが、まだ先は700mを残している。遠い。今日は先行者が1名、そのトレースを辿らせてもらう。10:40　乗鞍岳が見えてきた2070m地点で小休止。地図を見てもこのあたりまでが急坂のやせ尾根。ようやく難所を抜けた感じである。このあとは少しずつ傾斜がおちた樹林帯の中を進み、右手には穂高の峰々も見えてくる。十石山の大斜面が白く光り、滑るのが楽しみになってくる。樹林帯を抜けたところで上部を見ると、先行単独者がちょうドロップインするところだった。大声でトレース泥棒させてもらった礼をいい、どこから来たか尋ねると、朝5時に出発したという地元（松本）民であった。おかげでだいぶ楽をさせてもらった。

12:15 山頂に到着。吹きさらしの頂上はカリカリに氷化していたが、その展望の見事さは筆舌に尽くしがたかった。360 度何一つ遮るもののない眺望は、標高差 1100m、4時間半のアルバイトの報酬としてはこれ以上ないものだった。しばらくその眺望を満喫したのち、直下にある避難小屋の探索。冬期入り口から入ると、中はきれいに片付いており、立派に機能していた。一度は、生徒を連れてこの小屋を使わせてもらいたいと思ってはいるのだが、まだその機会はない。

槍穂高をバックに

乗鞍岳

下りは、最初の大斜面はまあまあの感じだったが、つかの間の楽しみ。あとは樹林帯の中を来た通りに滑った。楽しいと思えるような部分はそれほどなかったが、話の種にはなった。冬に日帰りということになれば、やはり山スキー以外では苦しいだろう、そう思わせる懐の広い山であった。ちなみに憧れて東京から来たという、途中で追い抜いたパーティは、頂上には届かず、僕らが登りの休憩をとった 2070m 地点から下ったあとがあった。このままでは時間切れになるという判断をしたのであろう。賢明な選択であろう。僕らは 14:40、登山口に無事到着。下山完了。

# 山スキー三昧その4　天狗原から蓮華温泉経由木地屋ツアー

3月19日、20日は信高山岳会の例会を行った。参加者のうち、フル日程で参加したメンバーは松田大、田中初四郎、大西。19日日帰りで天狗原から下山したのが、下島順一、徳永佳代、徳永剣の3名。翌日、木地屋に下るメンバーは、下山先の木地屋部落へ車回し。少し予定より遅れて、栂池に到着すると、休日故、すでに駐車場は満車。ここで地元の利を活かして、生徒の家に車を置かせてもらうことにする。チケット売り場に行くと、上部の林道で雪崩が発生したため、本日はロープウェイは運休中とのこと。あてが外れてしまった。さらに、ちょっとした手違いがあって、出発時刻は10時50分にずれ込み、予定よりだいぶ遅れてしまった。

ゲレンデを出たところで、登山医学会の増山茂ドクターの一行に会う。初心者ばかりなので、今日は天狗原までで下山とのこと。互いの安全登山を誓いあって別れる。こちらは、遅れた分を取り戻すべく、ややペースを上げて歩き出す。11:15に大経大ヒュッテ、成城大の小屋はそのままスルーして、一気に天狗原まで登りあげた。それまでは青空が広がっていたが、成城小屋を過ぎたあたりから天候が急変、風は強くなり雪が舞い始めた。長駆岡山からわざわざ参加している田中さんは、信高山岳会の中では「嵐を呼ぶ男」の異名をもつ。やはり！と、口の悪い仲間から散々からかわれる。13:15 天狗原の祠の前に到着。あわよくば、白乗の大斜面の滑降をと目論んでいたが、この天気では行っても何の楽しみもない。加えて危険でもある。本日はここから一方（宿泊組）は蓮華温泉、一方（日帰り組）は栂池へと二手に分かれ、下ることとする。

天狗原の祠の前で

蓮華温泉

田中、松田、大西の3人はパウダースノーを楽しみつつ、振り子沢を一気に下り、14:50 には蓮華温泉に到着、温泉につかって安着の祝杯を上げた。今年は3月18日、つまり前日からオープンしたという蓮華温泉は、前日は100人の超満員だったというが、この日は50人。夕食もゆっくりと楽しめた。

一晩中、さわさわと雪が降っていたが、翌朝は抜けるような青空が広がった。7時に宿を出発。ツアーコースにはピンクのテープが随所に張られており、迷う心配も少ないが、しかし油断は禁物。慎重にルートを選びながら、木地屋を目指す。林道をショートカットしたが故の登り返しが予想よりきびしかったが、角小屋峠までの標高差 150mを一気に登れば、このツアーの登りは終了。9:00、お茶を沸かして、一休みしていると、昨日宿で一緒だったスイス人の夫婦も追いついてきた。下ったのちは奥志賀へいくという。ダヴォス出身という陽気な二人だった。彼らと別れ、角小屋峠からの大斜面を一気に下り、ウド川右岸へと回り込み、そのまま名無しの池、白池へと滑り込んで、大休止（10:05）。あとは、林道を時折ショートカットしながら、滑り降り木地屋に到着したのは10:45。愉快なツァーだった。

角小屋峠にてスイス人夫婦と